

琉球古典音楽における演奏速度の変化

Change of Performance Tempo of Okinawan Classical Music

外間 早苗 HOKAMA Sanae

(沖縄県立芸術大学 Okinawa
Prefectural University of Arts)

工工四の歴史において初めて速度表示が記されたのは、1869年、野村安趙らの編纂した欽定工工四である。松村真信の脈を基に計算されたと言われているがその脈の速さは不明である。世礼国男は昭和10年、これまでの絃楽譜だけであった工工四に声楽譜を併記した『声楽譜附野村流工工四』を伊差川世瑞と共著で出版した。速度に関しては、欽定工工四の分脈に基づき、1曲全体の所要時間を何分何秒の形で表している。それ以後の工工四は、同じ曲であっても発行年が経るごとに所要時間も伸びている。例えば、〈かぎやで風節〉8分1厘の所要時間は、1935年発行がM.M.=89で、1969年発行がM.M.=65と大きな開きがある。速度に関する従来の意見では、真境名安興が明治44年に〈かぎやで風節〉はM.M.=88.2がふさわしいとしており、山内盛彬も、山内盛熹らの演奏がM.M.=88だったとしているが、速すぎるとして昭和の初期にはM.M.=72に訂正している。

演奏家19人による速度を計った結果、現在活躍中の演奏家の8分1厘の曲のテンポの幅がM.M.=47.4~82.4の間にあり、平均63.8となっている。故人の演奏家8人の平均が73であるから、それよりも遅くなっていることがわかる。さらに同じ8分1厘の曲でも、現在の演奏家8人のうち7人が〈早作田節〉を最も速く歌い、〈花風節〉を最も遅く歌っているという傾向が見られた。故人の演奏家の速度は現在の演奏家よりも速く、また、歌唱がない間奏部分は、速めに演奏されることがわかった。現在活躍中の演奏家は、演目ごとにテンポが似通っている。それは速度の表示を気にせず演奏されていることや、演奏会の増加や録音機器等の普及により、歌い方や速度が均質化してしまった結果だと思われる。

舞踊曲における速度については、「かぎやで風節」、「諸屯節」、「伊野波節」、「口説」、「花風節」等は、過去30年の間で緩やかに遅くなっている。その中でも特にコンクールの課題曲となっている曲は急激に遅くなっている。また、芸能祭や発表会等で一般の人によって演じられる地謡や舞踊よりも、名のある実演家の方が遅くなっている。それは長年の舞台経験による「思入れ」の差ではないだろうか。舞踊曲を構成する複数曲は、それぞれ分脈が異なっているが、速度に関係なく演奏されている。例えば、「諸屯節」は、〈仲間節〉の8分1厘と〈諸屯節〉の12分5厘であるが、その差を考慮して演奏されていないように思われる。

1960年代と現在の組踊の台詞の速度を測定した結果、「執心鐘入」の若松、「手水の縁」の山戸、「万歳敵討」の謝名の子等は速くなっており、反対に「執心鐘入」の宿の女、「手水の縁」の玉津、「女物狂」の母親等は遅くなっている。それは仇に攻め入る所や主人公が寺に助けを求める場面では、盛り上がろうとする傾向が見られ、女性はより女性ら

しさを強調するために遅くなりつつある。組踊の中で歌われる歌唱の速度は、ほとんどの二揚曲と長めの曲である〈仲村渠節〉や〈伊野波節〉は遅くなっている。特に〈子持節〉や「執心鐘入」の〈経文〉は年々著しく伸びている。組踊の上演時間を比較すると、仮名掛けと所作の入り方の約束事はほとんど守られているのにも関わらず、例外なくすべての演目が以前よりも遅くなっている。1時間内で終わっていたものが、1時間を超えるものが当たり前のようになりつつあるのが現状である。それは、地謡の歌唱の速度と立ち方の間の取り方に大きな原因があると思われる。このような伸びが豊かな表現としてあるのか、また、観客を引きつけるテンポであるかを今後充分検討する必要がある。